

秘書艦さまが出撃しました。

読多裏闇

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界が海を失つてから30年と少し。  
世界はまだ理由を解らずにいる。

などとワールド設定を気がついたら盛りまくる作者ですが、初期プロットはウチの秘  
書艦が可愛いんですよって言いたいだけだつたりします。

キャラクターですが、艦娘以外はもちろんオリキャラになります。そして、艦娘の背  
景や諸々の設定を気がつくと盛つてしまふ悪癖があります。ご了承ください。

私の知つてゐるこの子（艦娘）はこんななんじやない!!等の熱い想いはあるかと思いますが、対応しきれる部分と仕切れない部分がございます。是非とも参考にはさせていただきたいたですが、私のこだわりで艦娘が皆様の知つてゐる子じやない様に映るかもせん。

意図したことなのか、作者が雑魚なのかは感想にて問い合わせていただければと思ひます。

今作は不定期更新となります。何分作者が雑魚なのでご了承下さい。

# 目次

1話：働き者の秘書艦さま。

|

2話：とても優秀な秘書艦さま。

1

# 1話：働き者の秘書艦さま。

今日の執務は普段と変わらない通常業務に海上警備の報告、後は建造と開発の報告くらい。基本的なものはただのテンプレートの焼き直しでしかないし、さして難しいものじやない。自分一人でも処理できるわね。

その他の報告書とかも内容としてはよくある注意喚起に深海棲艦出現報告。特にこれといって大きな問題もない範囲のもの。多分、戦果欲しさにこぞつて他の鎮守府が動くでしようし、うちとしては慌てなくてよさそう。

提督さんへ伝える内容はまとまつたし、後は報告待ちの分だけかな・・・。

「第一艦隊帰投したわよ・・・つて、あれ夕立だけ？」

「あ、瑞鶴さん。お疲れ様です。報告聞きますよ？」

午前中に任務に出ていた第一艦隊が帰投、特に焦った様子もないから何事もなく終わつた感じでしうね。まあ、瑞鶴さん達なら失敗する方が難しい内容だと思うけど。

「もう完全に提督業代行しちゃつてるわね・・・。報告は後で書類で出すけど、中破以上の損傷無し。私もほぼ無傷だし会敵した深海棲艦は全て殲滅したわ。」

「分かりました。

終わつたら上手くローテーション組んで入渠してきて、と提督に言付かっています。」「了解。

…………うー、あー、やつぱり馴れないわね。」

馴れないつて……ああ、成る程。

「このしゃべり方の事っぽい？」

「それ!! それよ!!

秘書艦モードなのは分かるんだけど前の喋り方の夕立を知つてただけに違和感がハンパないんだけど!!」

遠回しにまじめ口調が似合わないと言われてるのが少し複雑ね……。

「まあ、ここに居る間は素でもいいっぽい?」

……うーんでも結構癖になつてきてるから難しいのよね。」

「提督の前では比較的素で話してるわよね?」

「秘書艦業務の時は丁寧に話していたんだけど、提督さんが『別に普段通りで問題ない』って言うから、折衷として”公的な場面以外での提督さんの前では比較的普段通りで話すこととしたのよ。』

普段から無意識でも丁寧にしておかないとボロが出ることも多いし。

「なんか、日本一の秘書艦の闇を見た気がするわ・・・。」

「とりあえず入渠してくるから、夕立もそろそろお昼にしたら?」

時計を見ればヒトフタマルマルをかなり過ぎている。今日の分のお仕事は終わつた  
とはいえ、まだまだ提督さんほどの手際には遠いわね。

「そうするっぽい。」

提督さん呼んできましょ。」

-----

結論から言えば、第三次世界大戦は起きなかつた。

正確には、あらぬ理由で始まりかけたがそれどころではなくなつた。

第二次世界大戦が終わり冷戦を乗り越えた世界はグローバル化への歩みを進め、ネッ  
トワークを介して世界が一気に近くなつた。多少のいざこざや政治的な対立はあれど、  
大戦に発展する様な大きな事件は起きていなかつた。

歯車が狂い始めたのはとある事件。

### 『太平洋石油タンカー爆発炎上事故』

とある石油産油国の大規模輸出タンカーが太平洋上で爆発し、広範囲に広がった石油によつて海上が文字通りの火の海になつた。

この事件をきっかけに始まつた深海棲艦の侵攻は世界各国を大混乱に陥れ、港周辺は大損害。

挙げ句の果てに増えた深海棲艦は高度な電波障害を発生させるらしく、有線または内陸部以外での通信はほぼ途絶。当初は各国間での会話もままならない事態に発展した。

制海権を完全に失つた各国が空路にてどうにかコミュニケーションを取ろうと画策するも、空母型の深海棲艦が現れ、島国などは完全な孤立状態となる絶体絶命の状況。

その世界の終わりに救いと可能性を生み出したのが、現代において国防の主力たる艦娘である。

「ほーい、ここまででなんか質問あるかー？」

「ダー。そもそもなんで司令官が歴史の授業をしているんだい？」

ここは鎮守府のとある一室で鎮守府の長たる提督自身が何故か駆逐艦に歴史の授業を行つていた。

白い海軍の制服を着た男がどちらかといえば幼い少女達に黒板を背に立つ光景は何

ともシユールと言わざるを得ない。

「それが、『本来ならば義務教育がある子供にちゃんと権利を与えているのか!!』的な人権保護団体さんが大本営に陳述書出したらしくてな・・・」

「義務教育を少しやつて報告書を出せっていう上のお達しだ。」「しれえも大変ですね。」

やつぱり今年のお正月はしれえの幸運をお祈りしておくべきだつたかもしれません。」

「雪風ちやんがそれを言うと洒落にならないようなん・・・」

歴史の授業?を受けていたのは艦娘。その中でも駆逐艦に分類される子たち。

見た目は小学生から中学生といつた年齢の子が黒板のある教室に座っている。

この空間だけ見れば海軍の制服を着ている人間が子供に歴史を語つてゐる。子供たちが着ている制服が海軍系に類似してゐる等が見られるものの、さしたる不思議さはない。

だが、もし。この光景を海軍関係者が見たのなら、どこの部隊を壊滅させに行く作戦会議ですか?』と問われかねない過剰戦力が集中していたりする。

「そんな事よりテートクー。授業をするのはいいとして、何でまた半世紀近くも前の内容なんだ?」

「半世紀は流石に盛りすぎだぞ、江風。30年前の話だ。」

今年は艦娘を中心として海軍組織が組み直されてから丁度30年になる。

この組織そのものは艦娘が発見されてから1年で整備された物なので艦娘歴としては31年となるだろうか。

この期間の短さを見れば当時どれほど切羽詰まっていたかが伺える。

「何故この内容にしてたのか、だが、まあ単純に艦娘自身の歴史つてここ30年の話だからな。

歴史やるならまずはここだろって話だ。・・・ん？」

「提督さん。そろそろお昼だから呼びに来たっぽい。

報告のためのポージングも十分出来てると思うし、そろそろお昼ご飯にしましょ？」

軽くノックをしてから入ってきたのは夕立。

秘書艦でもある彼女は提督の補助が仕事だが、現状、書類仕事のほとんどを彼女がまかなっている事もあり、実質的には提督と遜色がないスキルを有している。

それに加えて、本来の提督のお目付役も日々こなす精力っぷりで、この鎮守府を実質的に回しているのは彼女と言つて問題がないだろう。

「彼女がここに来たのも提督のお目付役としての仕事が名目だ。

「まあ事実なんだが、ポージングつて言つてしまふのはどうなんだ・・・？」

「見た目こそ小学生だけど、実年齢考えたら義務教育つて歳じやないっぽい。

何より、生まれたときからそこそこの一般常識が頭に入ってる段階で義務教育の必要性も怪しいよ？提督さん。」

事実として、艦娘は建造という処理で生まれ、その瞬間から今と同じ見た目のまま誕生し、一般常識も含めて大まかな知識と知性を持つ。

義務教育が必要なのか？という問いには疑問が残るのも肯けるだろう。

「それを理解している人間は少ないだろうからこういう問題も出てくるんだろうな。

まあ、それを使いだしたら子供扱いしている艦娘達に』 国の命運を背負わせっぱなし

つていう点の話もしないといけなくなってくる。言いだしたらキリがない奴だな。

それより飯にしよう。こつちの都合に付き合わせたし、少しくらいはおごって……。」  
けたたましく鳴り響く警報音。

深海棲艦の出現を知らせる警告音だ。

先程までの緩い空気は完全に消え去り、皆、次の行動に備えている。

一見すれば立ち止まって何もしていないように移るが、ここを動かないのは指示を仰ぐべき存在が目の前に居るからだ。

皆の視線が提督に集まる。

「…悪いが、お昼ご飯は仕事が終わつてからだ。

タ立。

「了解。

これより侵入してきた深海棲艦に対し、対処行動を行います。」

深海棲艦が現れて、艦娘が現れて。

戦争という野蛮な行為から少しずつ距離を置き、ある種の”一時の平和”とも言える時間を謳歌していた人類への怠惰さを罰するが如く、人類が恐怖を思い出させられてから30年と少し。

人類は未だにこの地獄の理由を証明できずにいる。

未だに海の陣取り合戦は終わらず、人類がこの星の霸権を握っているとは言い難い。だが、そう遠く無い未来、人類は霸権を取り戻し、真実に手をかけるだろう。

例えそれがパンドラの箱だったとしても。

これは、この神の不条理への意味も求め、ただ抗い続ける者達が真実に辿り着く物語。

## 2話：とても優秀な秘書艦さま。

艦隊司令室と言う名の提督の執務室には先客が居た。

「お疲れ様なのです。

こちらに向かつてる深海棲艦の情報、受け取つておいたのです。」

そう言つてメモ書きを渡している少女は夕立より一回り小柄の少女。

このままランドセルを背負つても違和感は皆無な見た目だが、立派な艦娘であり、實際には俺と同い年だつたりする。だが、実際にそれを本人に告げれば不機嫌になるのは必至なので触れてはいけない。

「ごめんね電ちゃん。代わりに報告受けてもらっちゃつて。」

「ほつとくとお昼ご飯忘れかねないどこかの司令官を呼びに行つてたので仕方ないのです。」

普段の秘書艦業務大変なのでこれくらい任しても罰は当たらないと思うのですよ？」  
秘書艦の仕事は忙しい。

そもそも秘書艦とは言わば艦隊司令官のお目付役であり、この鎮守府において艦娘と人間の関係を円滑に進める為の言わば艦隊側の代表者。

任命こそ司令官の手によつて行われる物の、司令官が指揮が出来ない状態と判断された場合実質的な運営を行う権限を持つ名実ともに鎮守府におけるナンバー12。提督の能力が高ければ良いが、低さに比例して過労死させられるそう言うポジションでもあつたりする。

「いや、これでも仕事してたんだぞ？」

「あんな仕事、適当に”やつておきました”つて報告書だけ書いておけば良かつたのです。

そして問題は、仕事を律儀にやりすぎるところなのですよ。」

「報告を見る限りただのはぐれっぽいけど、一応攻め込まれてるので緊張感出した方が良いっぽいよ？」

「事実もつともな指摘をしてるが、彼女本人も余計な力が入つてない辺り”いつも通りすれば問題ない”と見なしているようだ。

こここの鎮守府の艦娘のは経験豊富であり、戦力的に見ても連携をとらず無軌道に点在している深海棲艦（通称”はぐれ”）程度に後れをとるような戦力ではないし、敵を侮る愚か者は居ない。夕立も既に出撃を完了した先遣隊にいつでも指令を出せる状況を完

全に整えた上で索敵報告待ちをしてる段階。

故に出来ることもさしてないので雑談をしてると言つても過言ではない。

『報告だけで終わる茶番につき合わされたこっちの身にもなつてほしいんだけどな？

それより報告だよ。

敵艦視認。

軽巡2、駆逐3だよ。今のところ潜水艦は探知にかかる多分居ないかな？』

基本的に部隊が展開している場合通信は繋げっぱなしになつてている。理由は深海棲艦の電波妨害でいつでも通信が可能と言うわけではないからだ。本来ならばこの通信すらままならない状況下に居るのだが、艦娘が存在する地域ではそれが弱まる性質がある事が分かつており、孤立を防ぐためにも各国の艦娘確保が急務とされたのは言うまでもない。

それでも海上に近ければ艦娘が居ても通信はほぼ通らないし、海を越えてとなればほぼ無理なのだが、何事にも例外は存在する。と言うのも、艦娘はかつての船舶の魂を受け継いだ少女達であり、艦装と言う固有武装をつければその性能はほぼ船そのもの。当然の如く通信も出来るので、彼女達自身に通信を送ることが可能なのだ。

結論から言えば、彼女達自身に通信を送る場合は海上でも比較的通信が出来る事が分

かつた。

そもそも電波を妨害されているのに何故艦娘にのみ通信が通るのかはまだ解明されていないが、事実として出来る物は活用せざるを得ない、それ程までに世界は追い詰められているのだから。

閑話休題（それはさておき）。

敵を目視した以上、射程圏内までそれ程かからない。指揮をする側も仕事の時間である。

「今回も任せるぞ、夕立。」

「了解しました。」

領域侵犯を行う船舶を視認により深海棲艦と断定。

要殲滅対象として認定し、敵艦隊への攻撃を行います。

交戦許可。並びに本戦闘における現場指揮権を旗艦“響”に移譲します。』

『了解。

さて、やりますか。』

重ねて言うが現代では通信が根本的に通らない。

先の例外も音声通信が限界のため、指揮をする側は大局的な調整や戦術ではなく戦略に重きを置く物にならざる得ない。映像通信なども勿論無く、音声による状況把握と方

針を指示するのが限界。

基本的に提督は、この環境下でどうやつて指揮するかが提督の腕の見せ所となってくれる。

まあ、それが発揮される状況がほぼ発生しないのだが。

『こちら響、敵艦の殲滅を確認したよ。

敵影は確認出来ない。帰投しても良いかな?』

一切なんの問題も無く戦闘終了。

細かな指揮系統を移譲してるのはいえ、ここまで速やかに対処されては判断する以前の問題としか言えない。

「お疲れ様。

帰投して報告をお願いします。」

『了解。』

—————

戦闘はなんの問題もなく集結し、入渠と昼食を取った午後。

俺が見なければならぬ書類をさつさと片づけ、今は皆に伝えるお知らせ的な物をまとめている。

夕立はいつも通りそれ以外の雑務を確認しつつゆつたりモード、あとは電がお茶の準備をしている。

「夕立、例の勲章の授賞式が今週末にあるから、準備しどけつて催促来てるぞ。」「夕立ちやんの天然によつてとつてしまつた”日本一の秘書艦”ですか。

いやー優秀なのも大変なのです。」

日本一の秘書艦。

これは深海棲艦が現れて混乱の最中、少しでも士気を高めようとして始めたキャンペーンのようなもので、その名の通り全国の鎮守府で活動中の秘書艦を対象として実績や貢献度を鑑みランキングを行うというお祭りである。

艦娘と言う未知の存在に親しみを持つて貰う意味も含めてこの催しは全国のテレビで中継されており、それを取った艦娘は勲章を授与される。

夕立は今年の優勝者。

因みに今年で3連覇中で、全国民の中ではスーパーエリート秘書艦と言つても過言ではない知名度を持つ。

「あれは天然つて言うか、嵌められた感じがするっぽいんだけど・・・。」

「それは流石に人聞きが悪いのです。

そもそも”私と同レベルの秘書艦技能を身に付けるのを目標に頑張る”つて秘書艦業務を教えてほしいうつて言つてきたの夕立ちゃんなのです。」

元々、この鎮守府の初期艦、もとい最初の秘書艦は電である。電は元々ここに来る前から親しかつた事も含めて非常にマメで努力家なので恐ろしいスピードで業務を効率化。提督が居ようが居まいが関係なく運営できるほどの処理能力と対応能力を手に入れた段階で、新米提督には惜しい人材として引き抜かれかけるほどの手腕を見せつけ、その実績が評価され一時期は日本一に輝いていたのだ。

本人は結構不本意らしいのだが。

「あの時は電ちゃんが凄いのを忘れてたっぽい。

「て言うか、秘書艦業務だけで考えたら電ちゃんの方が凄いから、電ちゃんが受賞するべきじゃないかしら？」

「うちの鎮守府の秘書艦は夕立ちやんなんだから、私が行くのはお門違いなのです。

それに、あんなほぼアイドルかのような扱い、私みたいなちんちくりんが行つても映えないので。その点夕立ちちゃんは、駆逐艦とは思えないスタイルかつ美人なのでテレビ的にも美味しいのです。」

全国中継は伊達ではなく、この日本一の秘書艦を決める番組の視聴率は非常に高い。

出てくるのがどの子も現実離れした美少女が多い艦娘である事から一種のアイドル総選挙的な様相になつており、その筋のオタクは少なくない。

結果として艦娘のイメージキャラクターの様な扱いを受ける事も多く、軍としても艦娘という存在のイメージアップに起用する事に躊躇いがない。

その点からも比較的モデル体型な夕立が行くべきだと電が言う主張も分からなくはない。電も間違いなく美少女であるが、見た目年齢が固定化されてしまう艦娘は、見かけの成長が実質止まつており、電の見た目は駆逐艦の中でも比較的幼い。

それが悪い訳ではないが、役割としての需要で見ると夕立が向いていると言いたいのだろう。

「電ちゃんの前は10年くらい空母系の大型艦の人達が多かつたみたいで、電ちゃんが受賞したとき結構話題になつてファンがいっぱい居るつて乾大将が言つてたよ?」

「・・・ロリコンさんはお断りなのです。」

などと文句を付けていいる物の、この“日本一の秘書艦”という地位は艦娘の中では憧れの地位らしい。

提督の観点から見ても、受賞すれば、その秘書艦を育てた提督として貢献報奨金が支給されたりと特典も入る。何より艦娘は基本的に皆、年頃の女の子。アイドルの様にちやほやされるのも満更ではないらしい。

「一応、名譽ある勲章なんだからそう悪く言わんでも・・・。

まあ、テレビ関係は全部終わつてし、軍としての諸々だけだからすぐ終わる。

行くのが横須賀だから向こうで一泊挾むと思う。その間は電に指揮権渡すと思うからよろしく。」

「了解なのです。」